

『光る君へ 10』

心にも あらで憂き世に ながらへば 恋しかるべき 夜半の月かな

さんじょういん
三条院

【現代訳】

辛いことばかりの世だから、死んでしまいたいくらいだが、心ならずも生きながらえたならば、今宵の月は感慨深く思いだされることだろうなあ。

一条天皇の時代に、次期天皇である東宮^{とうぐう}として25年間も待って、36歳から5年間だけ天皇に即位した三条院の歌です。目の病気を理由に道長から退位を迫られ、出家を決心したときに、この歌を詠みました。

道長は、一条天皇^{じゆだい}に入内させた娘の彰子の子（敦成親王^{あつひら}）を早く天皇にし、自分が摂政として実権を得たいという思惑があったと考えられます。そのため、敦成親王はわずか6歳で後一条天皇として即位しました。彰子是一条天皇の遺志をついで、一条天皇と定子との第一皇子であった敦康親王^{あつやす}を先に天皇にするべきとして、父の道長と対立しました。彰子に仕えていた紫式部は、傷心の彰子を支えました。三条院は自分が退位する代わりに、長男の敦明親王^{あつあきら}を東宮にすることを条件にしましたが、三条院亡き後、敦明親王は自ら東宮を辞してしまい、後一条天皇の次も、その弟の敦良親王^{あつなが}が後朱雀天皇^{ごすざく}として即位することになります。

山陽小野田かるた協会 久保 久美子